

感動新聞 平成22年5月号 発行者 細川栄一

皆様、お元気ですか？ 今月は縁を大切にしましょう！ これからもご支援、よろしくお願い申し上げます。
ビジネス経営の最前線で頑張っておられる方の役に立つ情報となればと思います。喜んで頂ければ幸いです。

「縁を生きる」

2005年12月号「致知」より

「その先生が5年生の担当になった時、一人、服装が不潔でだらしなく、どうしても好きになれない少年がいた。中間記録に先生は少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。

ある時、少年の一年生からの記録が目止まった。

「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強も良く出来、将来が楽しみ」とある。

間違いだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思った。」

その続きを読んでいくと、2年生になった時に母親が病気になり、時々遅刻するようになり、3年生では、母親の病気がだんだん悪化し、看病に疲れて居眠りをするようになる。

そして、不幸にも母親が死亡し、

4年生の時にはやけになった父親から暴力を受けるようにもなるんですね。

そして、「先生の胸に激しい痛みが走った。ダメと決めつけていた子が突然、深い悲しみを生き抜いている生身の人間として自分の前に立ち現われてきたのだ。先生にとって目を開かれた瞬間だった。」というのです。

その後、先生は放課後に少年の勉強を見てあげるようになるのです。

そして、クリスマスの午後、少年が小さな包みを持ってきて先生にくれたのです。

それは、香水のビンでした。

多分、亡くなったお母さんが使ったものだったんですね...

先生はその一滴をつけて、夕暮に少年の家を訪ねます。

少年は飛んできて先生の胸に顔を埋めて「ああ、お母さんの匂い！」

と叫んだというのです...

私はこの場面を思い浮かべると、いつも涙が浮かんで来てしまいます。

その後、学校を卒業する時などの節目節目に、先生と出会えたことへの感謝の気持ちを伝える手紙が届きます。そして、医学部に進み、医者道を歩むのです。

ある時、結婚式の招待状が届きます。

そこに、何と書いてあったと思いますか？

先生に「母の席に座ってください」

と書き添えられていたのです。

その少年は、

この先生とのたった一年間の『縁』に永遠の光を見つけて人生を生きてきたのです。

この文章は何度読んでも涙してしまいます。

実際、この文章をパソコンに入力しながら・・・涙・涙です。

これほど感動的で、劇的な縁はそんなに多くはないかも知れません。

でも私たちだって日々の出逢いに感謝することはたくさんあります。

人でも、企業でも、自分に与えられた縁をどうとらえ、その中でどう生きていくかが大事です。

「因」があって、そして「果」がある。

禅宗の教えでは、その「因」と「果」の間に「縁」があるのです。

その「縁」をどう捉えるかで、その結果が変わってくるのです。

不思議な縁で結ばれた仲間たち、私たちです。

この縁は偶然ではないのです。必然なのですね。

すべての縁に感謝し、生かされていることに感謝したいですね。

あなたに出会えて良かったと言われるような「縁」を築きたいですね。